

放課後の夕闇が廊下の隅々にまで這い寄り、大学の校内がしんと静まり返る頃。私は誰もいない更衣室で、一人床を拭いていた。窓から差し込む斜陽はどろりと赤く、室内のスチールロッカーを不気味なオレンジ色に染め上げている。

キュッ、キュッ、と雑巾が床を滑る音だけが、コンクリートの壁に虚しく反響し、孤独だけが際立っていた。

（はぁ……やっと終わる。もう、絶対次からはあの講義が終わったら爆速で帰るんだから。大人しく残っていたら、今日みたいに教授から掃除を押し付けられるなんてたまんないもん……！）

運動部の部室棟にあるこの更衣室は、独特の湿り気を帯びた汗の匂いと、使い古されたスチールロッカーの鉄錆びた香りが重苦しく混ざり合っている。女子更衣室の華やかさとは無縁の、どこか雄々しくて、肌にまとわりつくような落ち着かない空気。

早くここを出て、外の冷たい空気の中に逃げ込み

たかった。そう思った、その時だった。背後で、重い扉が開く音がした。

（え……？ 誰……？ 掃除の人かな？）

心臓がドクンと跳ね上がる。嫌な予感に急かされるようにしてゆっくりと振り返ると、そこには、およそ掃除当番という役目とは無縁なはずの人物が立っていた。

「……うわ、まじで一人で掃除してんの？ えらすぎ」

そこにいたのは、金子逢人先輩だった。大学の運動部でも、いや、この大学全体で見ても『カーストの頂点』に君臨する男。端正な顔立ちに、誰にでも気さくに話しかける余裕。彼が通るだけで周囲の空気が一変して華やぐような、そんな圧倒的なオーラを纏った人。

私のような目立たない学生とは、一生縁がないと

思っていた存在だ。

「ええと、金子先輩……。どうして、ここに……？」

「あ、俺のこと知ってる感じ？」

「ゆ、有名、なので……っ！」

「あーね。……今日さ、教授がさ、ゼミの子に掃除をお願いしたけど、お前も様子を見てこいって言うからさ。あのおじいちゃん、人使い荒いよね」

「あ、そ、そうだったんですね……。わざわざすみません」

（教授がそんなことを？ でも、金子先輩がわざわざ私の様子を見に来るなんて……。なんだか、信じられない）

「そ。でも、もう終わる感じだね？ 隅々までピカピカじゃん」

「い、いえ。でも一通りは終わったので、あとは道具を片付けるだけです……」

「おお、マジありがとう。助かるわ。……ところでさ、君ってあれだよな。大学近くのパン屋で働いてるでしょ？」

「え？ ええと、はい……。そうですけど……」

急に話題が切り替わり、私は戸惑いながらも頷いた。確かに大学のすぐ近くにあるパン屋で週に二、三回、夕方のシフトに入っている。

（けど、金子先輩がお店に来たことなんてあったかな。こんなに目立つ人、もし来店したら絶対に忘れないと思うんだけど……）

「やっぱり。俺さ、実は見てて。君のことが気になってたんだよね」

「え……？」

あまりにストレートで、それでいて冗談めかした言い方に、心臓の鼓動が早くなる。彼はこちらの反応を楽しむように、ふっと口角を上げた。

カチャリ。

その時、背後で重々しい金属音が響いた。それは、この部屋の唯一の出入り口であるドアが、内側から

施錠された音だった。

「え、あの、先輩？ どうして鍵を……？」

「ん？ ああ、鍵ね。ちょっと邪魔が入ると嫌だからさ。ここ、たまに部員が忘れ物取りに来たりするし」

驚いて問いかけた私に対し、金子先輩は手に持った鍵をひらひらと揺らしながら、一歩、また一歩と私の方へ歩み寄ってくる。その足取りはどこまでも軽い。

なのに、私は危機感を覚え、脳内で警鐘を鳴らした。

「いや、実はさあ、あのパン屋俺の家から近くてさ。窓越しに一生懸命働いてる君のこと、ずっといいなって思ってたんだよね。いつ声かけようかなって、タイミング計ってたんだけど」

「あ、あの……っ、掃除も終わりましたし、失礼します……っ！ 道具、片付けてきますから！」

逃げるように先輩の脇をすり抜けようとしたが、彼は長い腕を伸ばして、あっさりと私の進路を塞いだ。スチールロッカーに片手をつき、私をその間に閉じ込める。

「ええ、ちょっと待ってよ。せっかくだしさあ。もっとゆっくり話しようよ。……ねえ、そんなに怯えなくていいじゃん。俺、そんなに警戒されるタイプ？」

「そ、そういうわけじゃ……っ。で、でも、鍵を閉めた場所に、二人っきりは、ちょっと……」

「……そうだね。俺も、普通に誘うつもりだったんだけどさ。君がさっきから、隙だらけで掃除してるの見てたら、我慢できなくなっちゃったんだよね」

低い、熱を孕んだ声が耳元で弾ける。逃げ場を塞ぐようにロッカーにつかれた先輩の手が、私の肩を優しく、けれど拒絶を許さない強さで抱き寄せた。

「ひ……っ、か、金子先輩……っ」

「どっちかっていうと、逢人先輩がいいかな」

不意に、右側の太ももに温かい感触が滑り込んできて、じりじりと肌を撫で上げた。

「そんな暗い顔しないでよ。もしかして、怖がらせすぎちゃった？」

「か、金子……逢人、先輩……っ！ いえ、その……っ。離して、ください……っ」

「もうちょっと。君の肌、すごく柔らかいね」
（えっ、ちょっと……っ！？ 先輩の手、どこ触って……っ。スカートの中にまで指が入ってきてる……っ！）

先輩はまるでおしゃべりでも楽しむような、飄々としたトーンを崩さない。

けれど手元では、信じられないほど不埒な動きを繰り返している。膝の上から、スカートの裾をゆっくりと捲り上げ、露わになった生足を大きな掌で堪能するように撫で回す。

「……やっぱり。想像してた通り、スベスベ。吸い付くみたいにモチモチしてて、最高なんだけど」

「ん、あ……っ。や、めて……だれかに、見られ……っ♡」

「大丈夫。ここには誰も来ない。鍵も閉めたし……この更衣室は、今、俺たちだけの独占状態だから。……ねえ、そんなにビクビクしてると、もっと虐めたくなるんだけど♡」

（やだ……っ♡ 太ももの内側、指でなぞられるだけでゾワゾワして……変な感じになっちゃう……っ！先輩の手、すごく熱くて、心臓の音がバレちゃいそう……ッ♡）

「ん、やあ……あッ♡」

指が徐々に上へと上がり、足の付け根の際どい場所に触れた瞬間、思わず声が漏れてしまった。慌てて口を塞ぐけれど、先輩はそれを見て、いじわるそうに目を細める。

「何？今の可愛い声。……もしかして、俺に期待

しちゃった？」

擲揄うような低音。そう言ったかと思うと、先輩の手は迷いなく私のおまんこを、ショーツ越しに、強く鷺掴みにした。

「ひゃうんっ！？……あ、あッ♡」

「うわ……。まだ触り始めたばかりなのに、もうこんなに熱い。……君、本当はこういうの、嫌いじゃないでしょ？」

（うそ……。ショーツの上から、割れ目に指を食い込ませて……。押し込みながら、グリグリって……。やだ、恥ずかしいよお……。ッ♡）

「や、め……。ンッ……。ああ♡ あ、くん……。っ♡」

「ここ触って欲しかったんじゃない？ ほら、指の形に合わせて、おまんこがヒクヒクしてる♡」

「ちが、う……。ッあ♡ はあん……。っ！ 逢人、せんぱい……。っ♡♡」

（逢人先輩の指が、おまんこ、下着越しだけど触ってる♡ お腹の奥がキュンってして……。っ、蜜が溢

れてくるのがわかる……ッ♡)

先輩は軽口を叩きながら、下半身を執拗に弄り続ける。

拒絶しようにも、彼の圧倒的な支配感に気圧されて、声が出ない。そうこうしているうちに、私のショーツは自分でも引くくらい、じっとりと湿り気を帯びていった。

「……あれ？♡ なんか、ここ、すごい濡れてない？♡」

「えっ……あ、あ……っ」

「指がヌチャヌチャ鳴ってる♡ ……どれくらい濡れてるか、ちゃんと確かめてあげなきゃね♡」

「ひゃっ！？♡♡ あ、あああっ♡♡」

先輩がショーツの脇から長い指を潜り込ませ、直接おまんこに触れてきた。ぬちゅ♡ という卑猥な音が密室に響き、私は顔を真っ赤にして俯くしかな